

就学前の音楽活動について：大阪府高石市での保育所（園）・幼稚園へのアンケートをもとにした考察

著者	篠原 秀夫, 楠見 怜子
雑誌名	金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要 = Bulletin of the School of Teacher Education
号	7
ページ	151-160
発行年	2015-03-27
URL	http://hdl.handle.net/2297/41605

就学前の音楽活動について

—大阪府高石市での保育所（園）・幼稚園へのアンケートをもとにした考察—

篠原 秀夫 楠見 怜子*

A Study of Musical Activities for Preschoolers

Based on the Results of a Survey in Questionnaire Form at Preschools in Takaishi City, Osaka

Hideo SHINOHARA, Reiko KUSUMI*

I はじめに

保育所（園）・幼稚園の子どもたちは、小学校入学と同時に大きな環境の変化を経験する。就学前教育では、幼児の自発的な遊びやさまざまな環境を通して活動を編成することを目標としているのに対し、学校教育では、すべての子どもに一定水準以上の教育を保証することが求められ、教科の指導が行われているからである。子ども一人一人がこのような変化に対応し、実り多い学習を展開できるよう、保育所や幼稚園と小学校が相互に教育内容を理解したり、子ども同士の交流を図ったり、指導方法の工夫改善を図ったりする保・幼・小の連携が求められている。

しかし音楽活動における交流は、そのほとんどが行事で行われており、実際の活動内容の共有や日々の活動への参加、連携のための小学校での指導方法の工夫改善はまだあまり行われていない。小学校に入学してくる子ども達がそれぞれの園で、どのような音楽活動を体験してきているかなどの引き継ぎがなされないまま、授業を行っている小学校がまだ多くある。

保育所（園）・幼稚園ではどのような音楽活動が行われているのだろうか。またそれぞれの園では違いがあるのだろうか。小学校入学時には鍵盤ハーモニカを既に習ってきている子ども達が多く、ピアノやリトミックなど、幼児の習い

事の低年齢化も叫ばれているが、保育所（園）・幼稚園でも演奏技術中心の音楽活動が行われていたり、行事で発表するためだけの音楽活動が行われていたりするのだろうか。

このことを明らかにするために本研究では、筆者の住む大阪府高石市の全保育所・保育園・幼稚園を対象に、面接と電話によるアンケートを実施した。そこでは、保育所（園）・幼稚園での音楽活動のカリキュラムや内容、所持する楽器、1日の生活の中でどのように音楽活動が行われているか、また行事における音楽活動等について質問し、各園での音楽活動について調査した。以下ではその結果を基に、保育所（園）・幼稚園で行われている音楽活動のカリキュラムや内容を考察し、問題点や課題について検討を行った。そしてこれらをふまえて、就学前の音楽活動と学校教育の音楽科の連携について考える。

II アンケート結果と考察

平成25年10月から平成26年2月までの間に、大阪府高石市の保育所・保育園・幼稚園全13園について、面接と電話によるアンケート調査を行った。廃園になる予定であった市立幼稚園1園と、私立幼稚園1園からは回答が得られなかったが、11園から回答を得た。

アンケートの質問は以下の通りである。

- ① 園における幼児の数、教職員数
- ② 教育目標
- ③ 園における音楽活動の特色
- ④ カリキュラム (誰がどのように立てているか)
- ⑤ 選曲は誰がするか
- ⑥ 園にある楽器、教室にある楽器、個人で持つ楽器
- ⑦ 行事における音楽活動
- ⑧ 1日の生活と音楽活動
- ⑨ 音楽活動への教職員の研修
- ⑩ 音楽活動に対する教職員の要望

1. カリキュラムについての結果と考察

アンケート調査の結果、カリキュラムを決めたり選曲したりするのは、担任が最も多いことが分かった(図1・2)。また園内部に担当者を置くよりも、園が依頼する音楽専門の講師がカリキュラムを決定したり選曲したりすることが多いことも分かった。これらから、カリキュラムを決めたり選曲したりする人は園によって異なることが明らかになった。

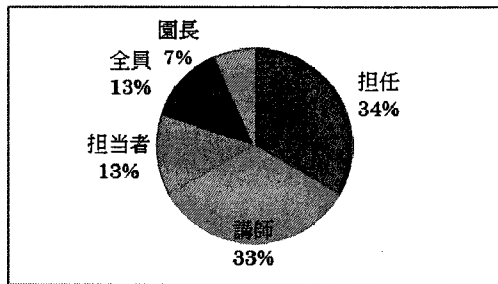


図1 カリキュラムを決める人

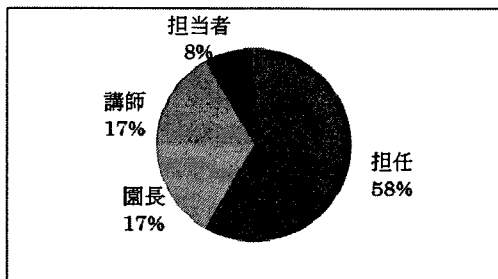


図2 選曲する人

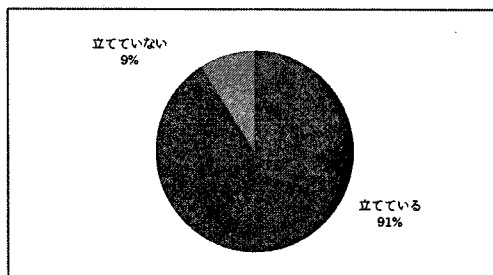


図3 行事に関連させてカリキュラムを立てているか

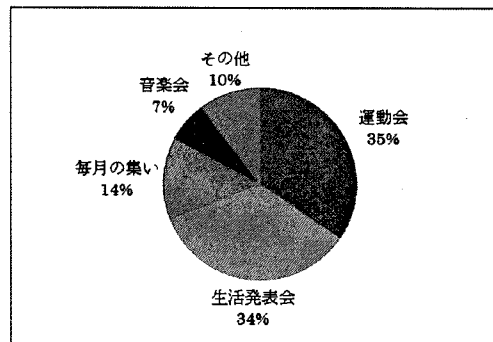


図4 音楽の発表をしている行事

表1 保育所保育指針表現(音楽)に関する記述¹⁾

保育所保育指針 第3章 保育の内容
<p>才表現</p> <p>感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。</p>
<p>(ア)ねらい</p> <p>① いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。</p> <p>② 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</p> <p>③ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</p>
<p>(イ)内容</p> <p>②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。</p> <p>③生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。</p> <p>④生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。</p> <p>⑤様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。</p> <p>⑥感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたりつくったりする。</p> <p>⑧音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。</p>

表2 幼稚園教育要領 表現(音楽)に関する記述²

幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容
5 感性と表現に関する領域 表現 感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
1 ねらい (1)いろいろなもののおもしろさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
2 内容 (1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたりつくったりなどする。 (6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。

さらに、年間を通してどのように音楽活動を行うかは、いつどのような行事があるかに関連づけて立てられていることがほとんどであることが分かった(図3)。また、音楽活動が行われる行事は多く、年間を通して様々な音楽活動が行われていることが明らかになった(図4)。

ここでカリキュラムについて考える際に、まず保育所保育指針と幼稚園教育要領の音楽に関わる部分が、どのように示してあるか確認する。

保育所保育指針(表1)では、子どもの身体機能や生理機能、運動面や情緒面、知的な面など多様な発達の側面は、相互に関連しながら総合的に発達していくものであるため、「音楽」という特定の方法よりも様々な方法を混在させて表現を楽しむことを重要視していると考えられる。

幼稚園教育要領(表2)では、幼稚園生活において、音楽、身体表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と自分なりの表現ができるような力を培うが大切であり、それを実現するために、表現する過程と表現に関する指導の充実を目指すことが基盤となることが示されている。幼児の発達において、「音楽」という特定の活動よりも、音楽に合わせて身体を動かしたり、踊ったりなどの様々な素材が連動しあう表現活動の方が多く、幼児が遊びの中で身近な周囲の環境と関わりながら感じたり、考えたり、イメージを広げたりなどの経験を重ね、創造性を豊かにするとされている。

このように、保育所保育指針でも幼稚園教育要領でも、まず生活体験の中で気づいたり、感じたりすることで、イメージを豊かにし、それを音楽でも表現することを大切にしている。様々な活動と組み合わせながら、何よりも楽しんで音楽活動をし、表現することが大切であるとしている。

では、指針や要領にはねらいや内容が示してあるにも関わらず、なぜ園によって様々なカリキュラムが存在するのだろうか。また、現在多くの園で行われている行事中心にカリキュラムを立てるという方法は、指針や要領のねらいや内容に沿ったものになるのだろうか。

白石(2001)によると、幼稚園カリキュラムにおける音楽活動は「ねらい」「内容」「教師の意図」の関係性が多様、曖昧、希薄であり、このことが保育における音楽活動の見方を困難にしている原因である、としている³。音楽を目的とする教育では、音楽活動は「音楽の目標→内容→方法(教材)」という流れで捉えられているのに対し、保育の場合は「ねらい」が保育のねらいであり、そのねらいが包括的であるため、それに向けて音楽活動が果たすべき役割を導き出すことが難しい。また、このことで教材が「季節や行事」で選ばれ、音楽活動がねらいとは切り離されたところで行われしまっているというのである。

さらに今のように「行事」を中心に考えられるカリキュラムだと、発表に向けての、成果に近づけるための技術指導が中心になってしまい、結果「楽しさ」から離れがちになってしまう。幼児の日常的な音楽行動と、保育者が考える行事での固定的な成功イメージが食い違っているために、行事のための演奏指導が幼児の「楽しさ」を奪ってしまっているケースが多くあるようである。

キース・スウィンウィック(1988)は、幼児期の子どもの音楽を「遊びとしての芸術」としてとらえ、子どもの音楽的発達を、経験されたことからの音楽的発達に限定してみるのではなく、遊びの中にみる必要性を述べている⁴。もともと子どもはそれぞれの音楽的なものをもって保育現場におり、子どもは五感で音楽的に感じ合う経験をして、自ら興味、関心をもった音楽的なものを個性的に繰り返し、表すことによって、さらに音楽的に成長し、音楽的にも自立していくのである。しかしその表現は未熟であり、大人にとって見えにくい為、保育者は子どもに一方的な音楽的な環境を与え、獲得させたい、といった考えに陥りやすい。

以上から言えることは、まずは幼稚園カリキュラムの包括的なねらいに対して、音楽がどのような形で関わるができるのかについて音楽科としてしっかり考える必要があるということである。音楽を様々な活動と組み合わせることが具体的にどのようなことなのかを示し、外遊びの中で、散歩中に、または室内遊びの中で、ことばや身体活動と音楽をどのように関連させて用いることができるのかについて考え、具体的な活動として保育者に示していくことが必要である。

またそれが幼児のどのような音楽的姿に現れるのかについても明らかにする必要がある。日常的な遊びの中で音楽的な表現をしている子ども達の姿が一体どのようなものか保育者が理解し、意識的にみることができるようになることで、成果に対するイメージや行事での音楽活動

の発表の形を変え、行事中心のカリキュラムを立てることが少なくなるのではないだろうか。

行事での発表のために、正しい音程で大きな声で歌うことや楽器を上手に演奏することにとらわれず、生活に密着した楽しい音楽活動の中で、音楽で表現する楽しさを味わえるようなカリキュラムを立てることが大切である。

2. 内容についての結果と考察

(1) 歌

歌はどの園でも一日の生活の中で多く歌われていることが分かった(図5)。わらべ歌や手遊び歌、童謡、はやりの歌などが、朝の会、終わりの会など決まった時間だけでなく、自由遊びの中でも歌われていた。中には、発声練習をする園もあった。曲は、市販の楽譜集から選ばれることが多く、ピアノ伴奏つきで歌われることが多かった。

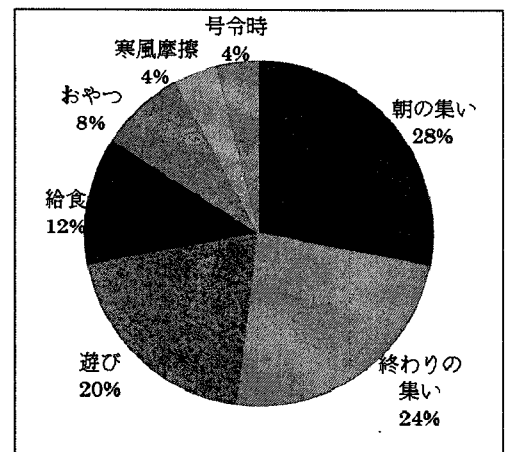


図5 1日の生活における歌唱活動

用いられる歌唱教材の傾向として、秋山(2012)によると、自然・季節に関する曲や、現代(1990年以降に作られた)の曲、それだけでなく明治期以来の子ども向け歌曲も多く歌い継がれていることが分かっている⁵。今井ら(2010)の調査では、幼児の「うた」は、児童のうたに比べて「生活に関するうた」「動物に関

わるうた」「のりものに関わるうた」「身体に関するうた」の割合が高いことが分かっている。「手遊びうた」「身体に関するうた」は身ぶりを使った模倣遊びと通じ、うたと動作が対になっているものもある。「生活に関するうた」は歯磨きや挨拶など生活するうえでのルールをうたで反復して楽しく身につけるもので、「動物に関わるうた」「のりものに関わるうた」は自分の内的表象を表現することが多い⁶。このようにさまざまな歌が選ばれ歌われている。

また歌は行事でも非常によく歌われている(図6)。歌はいつでもどこでも歌いやすく、合奏よりも手軽に行えるうえに、行事においての一体感や目的意識を持ちやすいことが理由であると考えられる。

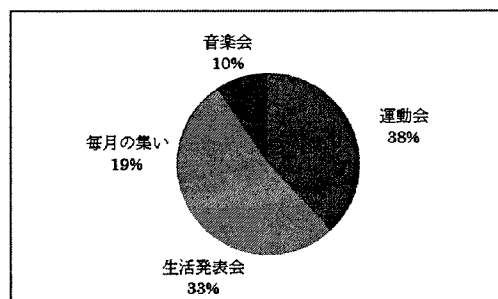


図6 歌を歌う行事

丸山(1987)は歌を用いる時の注意として次のように述べている。「いい教材がちょうどいい時期にいい渡し方をされると、教材は最初から生き生きと子どもに働きかける。教材を渡すときの教師のイメージが新鮮で、豊かで、教師自身の内部を明るく満たしているとき、その歌は子どもの全感覚を開き、快い自然なリズムが子どもを方向づける。—中略—教師の固定化したイメージの枠が押し付けられると、子どものイメージはその中にとじ込められてしまう。すると、子どもは保守的になり、自分をもっと開いてくれる働きかけを受け付けなくて、一つの型に固執するようになる⁷。」原(2009)も、「保育者が、子どものうたに対して飽きてしまい、新

鮮な驚きやときめきを感じなくなっているのか。それは、そのうたが、その時々々の環境にとって必然性がないからか、不的切だからなのか、それとも保育者の感性が鈍っているのかを見極められているか。そのうたに最初に抱いた快さが、歌い慣れ、弾き慣れるに従って色あせ、固定化していないか。子どもたちを、手馴れた方向へ導き、一定の型にはめるような歌わせ方をしていないか。自分のうたは優しくないのに、子どもには優しく柔らかく歌うことを求めているか。粗雑な感覚で子どもをあおって『大きな声で元気よく』歌わせることに満足していないか⁸。」としている。

このように、歌、特に季節の歌は固定化されてしまいがちであり、幼児の発達段階に関わらず、歌詞の難しさなど考慮されないままに用いられることが多い。また、保育者から提示する際にも義務的になってしまう傾向がある。よって、既成の曲を用いる場合でも、もう一度曲を見直し、保育者も新しくとらえ直して幼児に提示することが大切である。

また既成曲や決まった曲だけでなく、幼児が自然などの環境との関わりや、活動の中で自然に生まれた歌を取り上げたり、みんなで共有したりすることも、歌唱活動において大切である。幼児が感動したものの、頭の中にイメージとしてあるもの、体験したものを共に歌うという発想に基づいて、幼児のつぶやきから出た歌なども取り上げて共に歌うことができれば、幼児の表現はさらに広がりを見せるであろう。この広がりが、小学校以降における歌で表現する喜びや音楽作りにもつながっていくと考える。

(2) 楽器遊び

調査の結果、ほとんどの園に打楽器とピアノがあることが分かった(図7)。また行事で和太鼓・鼓笛隊の発表を行う園は、それらの楽器も多く備えてあった。打楽器は日常の楽器遊びや合奏の際に用いられていたが、教室にはほとんど置かれておらず、日常的に楽器を用いて遊

ぶ園は少なかった(図8)。

鍵盤ハーモニカは、一人一人貸出したり購入したりして使用する園がほとんどであった。鍵盤ハーモニカを3歳から指導する園も少なくなく(図9)、そのほとんどが楽器遊びの時間に行われていた。

鍵盤ハーモニカを使用する理由は、合奏の旋律楽器として、または小学校で使用するため、というものであった。しかし鍵盤ハーモニカの指導において保育者からは、なかなか興味を示さない幼児や難しくあまり弾けない幼児が多く、発達段階を踏まえた指導法や、興味を持たせる方法が分からない、という意見があった。

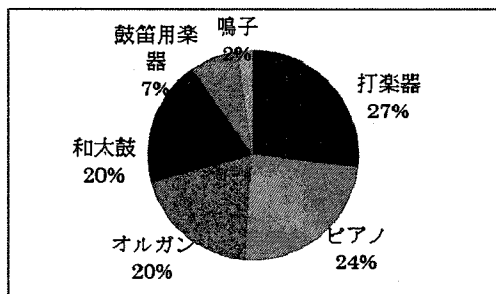


図7 園にある楽器

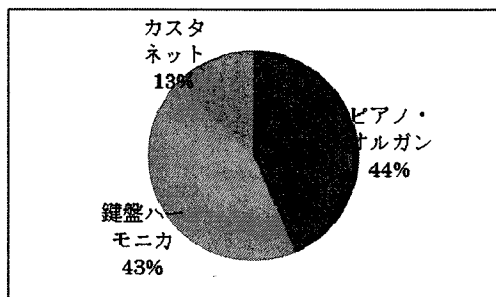


図8 教室にある楽器

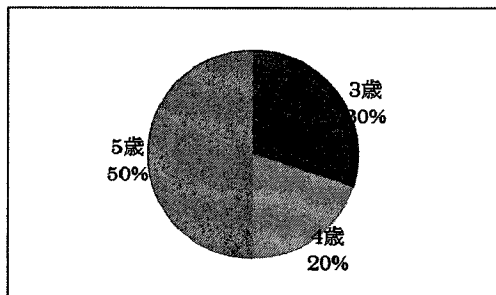


図9 鍵盤ハーモニカを始める年齢

鍵盤ハーモニカが園で広く使用されるようになった背景には、小学校における器楽教育の発展や楽器産業、早期教育についての考え方など様々な要因がからんでいると考えられる。実際に、鍵盤ハーモニカの活動のほとんどが器楽合奏という形でまとめられ、その為に多くの時間が費やされていた。しかし保育者の意見をふまえると、鍵盤ハーモニカでの合奏は幼児の実態に合っていないのではないかと考えられる。よって鍵盤ハーモニカを使う際には、幼児の実態に沿って活動内容を考え、選曲、練習方法、発表の形についてしっかり見直す必要がある。指の練習としてではなく、楽器遊びの一環として、発表もその延長として行うことができれば、無理なく楽しめるのではないかと考えられる。無理に鍵盤ハーモニカを使わなくても、打楽器をたくさん使った「楽器遊び」をもっとたくさん行うことが大切である。小学校に入学後の子ども達も、楽器遊びは大好きである。幼児ならなおさら、鍵盤楽器で合奏を行うよりも、遊びながら器楽活動を行う方が良いのではないだろうか。その為には、教室に楽器を置き、遊びの中で自由に使うことができるような環境が必要である。この時期のたくさんの遊びの経験が、音への敏感さや感受性を育て、小学校以降の音楽作りの活動や、器楽演奏・合奏にもつながると考える。

(3) 和太鼓・鼓笛隊

高石市では、和太鼓を使い、発表する園が多いことが分かった(図10)。

理由として和太鼓は、身体全体を動かして自分

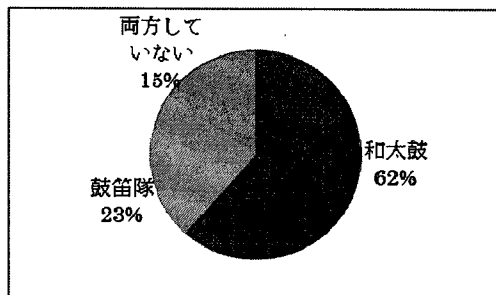


図10 和太鼓・鼓笛隊にとり組んでいるか

の気持ちを表す幼児に適した楽器であると考えられており、また泉州地域で多く行われている「だんじり祭り」にも和太鼓が使われており、幼児にとっても身近な楽器であると言えるからである。野口（2010）によると、和太鼓を使った音楽表現活動には2種類あるという。一つ目は合奏を想定した形式で、多数の和太鼓を使い指導者の提案する曲を暗譜し、練習も指導者主導で、一定期間に集中して練習を積み上げていくものである。発表の場面では、演奏者としての子ども全体の統一感を重視している。二つ目は、日常の保育の中で、必ずしもバチを持って打つばかりでなく、手で鼓面の感触を楽しんだり、音に合わせて歌を歌ったり、和太鼓という楽器への子どもの主体的な姿勢を見ながら子どもの心と対話してすすめていく方法である。行事に向けクラスでとり組んでいく場合でも、和太鼓を打つ行為は子どもの主体的な動きや身体表現が優先される⁹。幼児の活動においては、後者の方法が望ましいと考えられる。

次に鼓笛隊について井上（1994）は、鼓笛隊の活動自体は音楽的要素の他に規律や協調性、体育的要素が含まれた総合的活動だが、なぜその活動を取り入れているのかということや、指導法を考えなければならず、勝負や結果にこだわってはいけないと述べている¹⁰。

このように和太鼓も鼓笛隊も、行事の発表のための練習になっていないか見直す必要がある。幼児のどのような成長のために和太鼓や鼓笛を使うのか、めあてを明らかにして幼児の実態に合った内容を選びその練習方法も工夫しなければならない。次に子どもの反応を見て、出している音をしっかりと聴き、活動が幼児の実態に合っているかを判断しなければならない。野口によると、「共に楽しんで一緒に太鼓を打っているとき、そして、子どもが打つ部屋の中に響いている和太鼓の音を気持ちよく聞いているとき、子どもの身体は柔らかくしなやかな動きで気持ちよさそうに動いている。大人が課題に追われず、子どもと和太鼓を打つことを心から楽しん

でいるとき、子どもの顔は柔らかく透き通った声で掛け声すらかけてくる¹¹。」という。和太鼓の打ち方がどうかではなく、幼児がどのような表情で、どう身体が動いているか、幼児の前回とは違う様子を見ることで活動が実態に合っているかを判断できるであろう。そしてそれに基づいた発表の形を考えていくことが必要である。

(4) リトミック

リトミックを行っている園は、予想よりも少なかった（図 11）。専門的な知識と技術が必要であるため、講師に頼らざるを得ない、というのが現状のようである（図 12）。

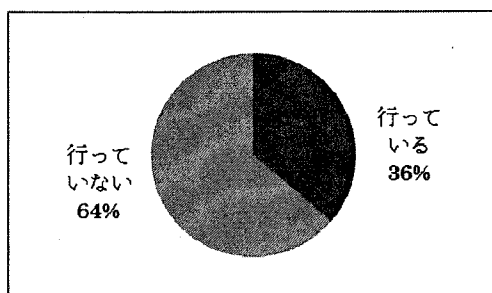


図 11 リトミックを行っているか

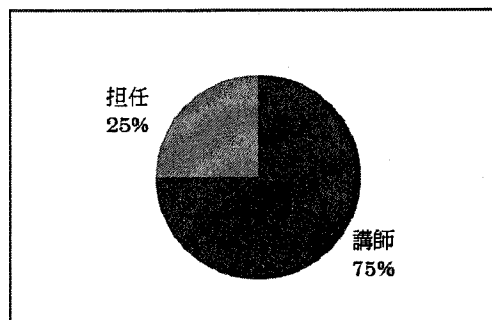


図 12 園でのリトミックの指導者

リトミックはスイスのダルクローズが創始者であり、リズム活動、ソルフェージュ、即興演奏を重視している。音楽教育にリズム運動を取り入れ、音楽に反応して動くことで想像力や表現力を養い、身体の協調・調和を作り出すことを目的としている。またリトミックによる模倣遊びは、動物・植物・自然・遊び・生活など子

どもたちの身近なテーマを用いることが多く、音楽を通して行うことにより、感受性を豊かにし、個々のイメージを広げて表現していくことが期待されている。幼児はリズムや音楽を聴いて、自分が感じたように自由に身体全体で表現していく。このように幼児が主体となって音楽にのせて表現したり、体を動かしたりするリトミックは幼児に有効な体験であり、幼児の発達を支えるといわれている。

しかしリトミックをはじめ、幼児に有効であるといわれている他の教育方法も、現場ではほとんど取り入れられていないことが分かった。リトミックをさらに普及させるためには、専門の講師に頼む以外にも、簡単なピアノ演奏でも活動ができるような教材を開発して現場の保育者でもできるようにしたり、遊びの中でのリトミックの展開方法の実践を行ったりするなどの工夫が必要である。橋本・菜原(2014)も、専門講師による本格的なリトミックよりも、子ども達の心身の調和のとれた豊かな表現力を育てるためには現場の保育者が音楽を楽しむ気持ちを持ち、日々のさまざまな活動の中でリトミック的な保育を少しでも入れることが大切ではないか、と述べている¹²。現場の保育士ができるような方法を考えていくことが、リトミックの普及につながり、幼児期に必要な身体全体を使った音楽活動が展開できるようになるのではないかと考える。

3. 指導者についての結果と考察

今回の調査で、専門の音楽講師を依頼している園が多いことが分かった(図13)。講師は特に決まったところから派遣されているわけではなく、音楽が得意な元保育士や、音楽教室の講師、市に依頼し派遣される講師など様々であり、期間もほぼ毎日から年に1回という状況であった。

音楽講師への依頼内容としては、カリキュラムの決定、選曲、子どもへのリトミックや和太鼓の指導、使用する曲の編曲や保育士への講

習・ピアノレッスンなど、多岐に渡っていた。講師が1人でない場合もあった。

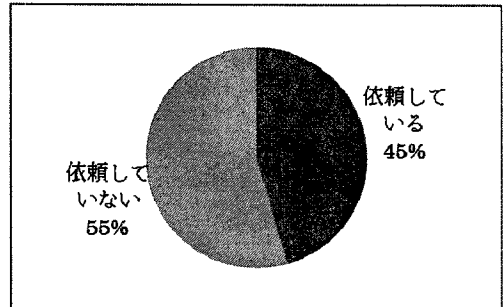


図13 音楽講師を依頼しているか

これらが何を意味しているかという点、園や保護者が求めている音楽活動の多様性や水準と、現場の保育士達の音楽技術があまりにも掛け離れているということではないだろうか。また、音楽活動への大きな期待も表れていると考える。現在園で行われているカリキュラムや方法で、保育者の負担を考えたならば、講師は必要といえるだろう。しかし行事とは関係なく、様々な活動や遊びと関連させた音楽活動を行うのであれば、講師は必ずしも必要とは言えないのではないだろうか。もう一度原点に立ち戻り、カリキュラムから見直してみる必要がここにもあると考える。

では、実際に幼児と関わる保育者は、音楽活動において幼児にとってどのような存在で、どのような視点に注意して幼児と関わっていくことが必要なのだろうか。

今川(2006)は、子どもの音楽表現を、子どもの周りのあらゆる環境の視点と交流しながら捉えなおすことで、新たな展望がみえる、と述べている。「子どもは特に何かを意識しながら歌や身体的リズムなどの音楽的なものを表しているわけではない。あらゆる環境から自由に音楽的な物を感じ、取り入れ、その音楽的な経験を繰り返している。それだけでなく、他者と同じ音楽的イメージを持ち、音やリズムを共有し、音楽的発達を深めていくと考えられる。このよ

うな子どもにとって音楽的なものを通して人を受け入れ、人に受け止めてもらい創造的な世界を味わうということは、生きていくことの実感である¹³。」また、マクドナルド・サイモンズによると、幼児が音楽を体験する空間は、保育者の態度に依存しており、幼児の音楽的発達も、幼児が、大人といっしょの楽しい音楽的経験に参加する多くの機会を与えられて高められる、としている¹⁴。このように、保育者と共に音楽活動を楽しみ、それを保育者に受け入れてもらうことが、幼児の音楽的発達には必要であり、このことが保育者の音楽活動における最大の役割であると考えられる。

しかし一方で、持田・金子(2008)は、子どもが遊びの中で表す創造的音楽表現が、保育者の介入や存在によって損なわれる可能性があることを述べている。「保育者は子どもに一方的に音楽的な環境を与え、獲得させたいといった考えに陥りやすく、習慣から決まった歌を歌うことや、大人にとって分かりやすいリズム、メロディ、ハーモニーといった音楽をさせることを優先してしまう保育者の介入が、却って子どもの創造的な表現を中断させる可能性がある¹⁵。」

よって保育者は、子どもの音楽を広い視野からとらえ、見守り、観察し、さらなる音楽表現へとつながるよう育てていくことが求められている。子どもにとって評価者でもあり、モデルでもある保育者が、子どもにどのような音楽を与えるのかを主眼とするのではなく、子どもは何を感じ、何を思い浮かべて音楽的に表現しているのかを理解し見守り、どうしたらより豊かに内面を音楽的に表現していくのかを考えていく視点が必要なのである。

Ⅲ おわりに

今回のアンケート調査において、各園で行事に基づいたカリキュラムが設定され、専門の音楽講師が関わりつつ、技術指導に多くの時間をかけて音楽活動が行われていることが明らかになった。

このような現状は、小学校での器楽指導との連携を見据えてのことであり、保護者からの活動の発表を見たい、という期待の大きさに応えての結果である可能性が高い。

しかし多くの先行研究から見ても幼児期には遊びの中で、何よりも楽しく音楽活動を行うことが幼児の発達において必要であることが明白であった。器楽指導を行う際でも、子どもの実態に合ったためあてや内容、方法が必要であり、また幼児の音楽表現を見守るという保育者の視点も必要であることが分かった。

よって今後は指針や要領のねらいにそった音楽活動を具体的に示し、園でのカリキュラムを作りやすくすること、またその音楽活動が保育者でもできるような教材開発、保育者養成機関での指導が必要である。

幼小との連携について考える際にも、幼児期の固有性は失わずに行うことが重要である。要領にも「幼稚園の領域は、小学校以上の学校における教科とは、その性格を大いに異にする。幼稚園時代は、まだ教科というような枠で学習させる段階ではない。むしろ子どものしぜんな生活指導の姿で、領域のねらう内容を身につけさせようとするのである。したがって、小学校の教科指導の計画や方法を、そのまま幼稚園に適用しようとしたら幼児の教育を誤る結果となる¹⁶。」とあるように、就学前の領域を教科に近づけるのではなく、小学校低学年の教科編成を領域とつなげることが必要である。例えば、生活科や図工、体育、国語など他の教科と関連させながら音楽の授業を行ったり、子ども達が入学前までに習ってきたわらべ歌を、リズム活動やふし作り、音楽作りや伝統的な音楽の中に取り入れて発展させたりすることである。このように、小学校での授業を園での音楽活動に近づけて考えることで、現在園で行われている行事や技術指導中心の音楽活動を変えることもできるのではないだろうか。これからは小学校低学年での音楽活動を見直すことも重要であると考えられる。

今後は、今回あまり見られなかった「聴く活動」を就学前にどのように行うかや、0歳児、1歳児といった乳幼児への音楽活動についても調べていきたい。そして就学前の音楽活動とつながる授業実践を小学校で行い、子ども達が音楽を心から楽しみ、生涯を通して音楽を愛好する心情を育てていきたい。

(引用文献・参考文献)

- ¹ 保育所保育指針
- ² 幼稚園教育要領
- ³ 白石昌子 (2001) 「幼稚園教師の音楽活動観とカリキュラム構造の関係」福嶋大学教育実践研究紀要第40号 P.99-100
- ⁴ キース・スワンウィック (野波健彦・石井信夫・吉富巧修・石井成美・長島真人) (1992) 「音楽と心と教育」P.63
- ⁵ 秋山治子 (2012) 「今、都内の幼稚園・保育園 (所) でどのような歌が歌われているか～アンケートの集計と考察～」白梅学園大学・短期大学 教育・福祉研究センター研究年報 No.17
- ⁶ 今井暁弐・吉村夕里・堀内詩子 (2010) 「幼児の音楽発達とリズムに関する一考察—楽曲分析と事例検討をとおして— 京都文教大学臨床心理学部研究報告2010年度第三集 P.26-27
- ⁷ 丸山亜季 (1989) 「音楽で育つ」一ツ橋書房 P.78-79
- ⁸ 原祐子 (2009) 「保育における子どものうた」 四天王寺大学紀要 第47号 P.201
- ⁹ 野口操 (2010) 「幼児の和太鼓における表現活動の研究—和太鼓に関わる行為の中での「子どもそのものの表現を観ること」について— 幼年児童教育研究第22号 P.93
- ¹⁰ 井上智賀 (1994) 「幼児の音楽活動に関する考察幼児マーチングバンドの現状と問題点」日本保育学会大会研究論文集 (47)
- ¹¹ 野口操 (2010) 「幼児の和太鼓における表現活動の研究—和太鼓に関わる行為の中での「子どもそのものの表現を観ること」について— 幼年児童教育研究第22号 P.96
- ¹² 橋本卓三・菜原桂子 (2014) 「リズムを取り入れた模倣遊びの実践とその意義」 北翔大学短期大学研究紀要第52号 P.96
- ¹³ 今川恭子 (2006) 「表現を育む保育環境—音を介した表現の芽生えの地図」 保育学研究第44巻 P.156-166
- ¹⁴ マクドナルド&サイモンズ (1999) 音楽的成長と発達—誕生から6歳まで 溪水社
- ¹⁵ 持田京子・金子智永子 (2008) 「子どもの創造的音楽表現に及ぼす保育者の影響」 文京学院大学人間学部研究紀要 P.44
- ¹⁶ 文部省 (1956) 「幼稚園教育要領」 「第Ⅱ章 幼稚園教育の内容」
 - ・松本晴子 (2010) 「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」にみる表現 (音楽) の考察 宮城学院女子大学発達科学研究
 - ・中西智子 (1989) 「幼児期の音楽カリキュラムへの提言—保育における音楽の有用性」 三重大学教育学部研究紀要第40巻
 - ・久富さよ子 (1980) 「幼稚園・保育所における楽器あそびとその問題点」 中村学園研究紀要
 - ・青木美智子 (2010) 『保育所・幼稚園・小学校における教育の方法としての「音楽」—保育課程・教育課程の連携を見据えて—』 桐朋学園大学研究紀要 36